

誤った禁欲主義

「コリントの信徒への手紙一」は第7章から後半の部分に入る。第7章は当時コリントの教会で問題になっていた性と結婚の問題を取り扱っている。パウロはここでキリスト教的結婚論のすべてを展開しようとしているのではない。コリントという性的道徳的に乱れきっていた特殊な社会に起こっていた、性と結婚を否定する極端な禁欲主義の問題を取り扱っていることをまず注意すべきである。

人間はなかなか円満になれないものである。ある問題が起こると、それに対する反動（反発）から、いわば振り子を振りすぎて、まったく反対の極端な立場に走ってしまうのである。性道徳の問題に関してコリント教会内に起こっていたのもそのような過ちであった。

道徳的に墮落したコリント社会で生きて来た信徒たちの中に、彼らを取り囲むあまりにも放縱な性の乱れという忌まわしい罪の姿に対する反動から、救われた者として神の御前に清く生きようとするあまり、性の交わりそのものを汚れたものとみなし、一切の結婚関係、夫婦関係を嫌い、ひたすら独身を守り禁欲を守ることが神に生きる道だと考える人々が出てきたのである。

使徒パウロが第7章で取り扱っているのは、この誤った禁欲主義の問題である。教会の歴史の中では、この箇所から僧職者の独身性とその霊的優位性を主張する考えがあったが、使徒パウロはここで、性をいやしめたり独身こそ神の前に「より聖い生活」であると教えているのではない。それとは反対に、性は恥ずべきものではなく神の創造の秩序に基づくものであり、また結婚は尊重すべき、また感謝すべき神の賜物であり、決してさげすんだり否定したりしてはいけないことを主張しているのである。事実、パウロほど主イエスと共に結婚の神聖性とその祝福を高く評価した者はいないのである（マタイ19:3~6、エフェソ5:22~33）。

キリスト教信仰が人類に貢献した祝福のひとつは結婚の神聖性を教え確立したことである。一夫一婦制度、神の前における夫婦の一体性、夫婦の義務と責任の自覚、特に性道徳における夫婦の責任等は聖書に負うところが実に大きい。日本においてもそうであった。かつて封建制度の下で、家族制度の維持のため、或いは後継ぎの確保のため、或いは血統を絶やさないうためにという理由で、一夫多妻・蓄妾（ちくしょう）制度が当然のこととされていた。

明治時代、日本にやって来た宣教師たちは、多数の神々と多数の妻妾をもつことに對し「唯一の神と唯一の妻とをもつべし」と説いて人々の嘲笑を買ったが、しかし彼ら及び明治のキリスト者たちの忍耐と努力によって、強力な封建制度下にあった日本も、少なくとも一夫一婦制に関してはほとんど聖書により教化されたのである。多くの人が指摘するように、これはキリスト教宣教が日本の社会にもたらした最大の祝福であり貢献であるといえる。結婚は実に神の恵みの賜物であり、結婚における男女の性の交わりも決して汚れたものではなく神によって与えられた聖なる賜物なのである。